

鴻 koh

月刊俳句誌

令和3年4月1日発行

(毎月1回1日発行)

第16巻第4号 通巻178号

4 月号

2021



米寿とは老いの振出し藪柑子

五風十雨遮るものなき枯野

雪雪雪刻を攫うてゆくごとし

考へて考へてゆく梅の下

积迦逝きし日なり一会の風の音

余寒なほわけても風のほとけ道

梅二月路地の奥より嬰の声

魚鼓打つて疵一つなき春の天

涅槃図の明るきまでの空の色

文机に鴻司句集と草の餅

ふはりふうはりひらりはらりと春の雪

好物と娘がもてなしの蒸蝶

百千鳥耳あたらしくしてゐたり

五風十雨

主宰作品

増成栗人

「鴻」の歳時記（春編）

抽出 石田蓉子

春 ベレー帽茶に替へ近江春となる 吉田鴻司

春 鳴き声の違ふ鳥きて春や春 中西富士子

春の暮 石仏の片身日を受く春の暮 荒井一代

花 冷え海舟の像の真裏の花の冷 霜鳥和子

風光る 風光る木馬が生きて廻り当す 吉野あさ

霾 霾や飛び出してゐる蛙の目 田辺満穂

春 雨 真四角な田の百枚に春の雨 増成栗人

春の虹 渡れるは釈迦かもしれぬ春の虹 緒方七星

霞 蕎麦喰うべ安土も比良も遠霞 竹山一子

陽 炎 かげろふや土蔵造りの美術館 坂入喜代枝

春の夕焼 春夕焼鳥の名知らぬ者同志 杉崎妙子

山 笑ふ 山笑ふとは山彦のいさみ足 五十嵐敏子

山 焼く 山焼の火は天平の色となる 佐久間敏高

剪 定 剪定の脚立をどこに据ゑやうか 岩佐梢

野遊び 野遊びの一日は母とゐるやうな 林 未生

蕨狩 香久山の平らかな日を蕨狩 荒川心星

風船 ひいふうみい紙風船のたなごころ 広瀬 弘

石 鹼 玉 石 鹼 玉 地球は自転続けゐる 伊藤啓泉

涅槃会 涅槃図へ入れぬ猫が膝へ来る 後藤兼志

修二会 修二会とは一期一会の宴かな 守屋吉郎

猫の恋 恋猫を辺り憚かる声で呼ぶ 畑田久美子

蝌蚪 蝌蚪の紐思ひおもひの少年期 ありかわみのる

蛙 初蛙隠し田に日の溢れゐる 渡辺 清

鳥 帰る 人ごゑの届かぬ高さ鳥帰る 谷口摩耶

鳥の恋 縄張りのなきがごとくに鳥の恋 松田那羅生

雀の子 啄んでゐる子雀の好奇心 河合公八郎

公 魚 公魚の五六度跳ねて凍りけり 中島 宙

梅 鎌倉五山その一山の梅の白 中 まり子

枝垂桜 しんしんと枝垂桜の内にをり 高木直哉

桜 ことのほか白き大島ざくらかな 豊田みどり

桜 舞ひ狂ふ桜に音の無き不思議 森 睡花

花 花に触れ多感な指となりけり 田中一光

花

昨日逢ひ今日また花の下に来る

遠藤 ヨシ

花

花匂ふ卵の多き鶏小屋に

佐藤 哲

落花

飛花落花言葉のいらぬ別れかな

五十嵐五郎

牡丹の芽

牡丹の芽膨らんでくる雨のあと

山口民子

木蓮

紫木蓮寺の名の傘たたみある

松川 苗

藤

山藤の人を拒める高さかな

横井 遥

藤

借景の藤房揺るる日もすがら

宮本かさね

桃の花

花桃のなか学校と無人駅

赤峰ひろし

菜の花

菜の花や田の神として石一つ

山内宏子

豆の花

豆の花空がこんなに青いとは

有江洋子

独活

朝の市籠に山独活溢れゐる

相川 健

堇

すみれ咲く日向ひとりとなるところ

北村 操

堇

小さきは小さく揺れて花堇

渡辺とくゑ

紫雲英

げんげ田の誰か遊んでゆきし跡

半谷洋子

蒲公英

一日をたんぽぽ長者子と歩く

富谷俊子

土筆

里山の子の手に余るつくしんぼ

村上栄子

犬ふぐり

犬ふぐり犬の跨いでゆきにけり

藤原 翔

母子草

母子草小さな旅に誘はるる

槇尾麻衣



『言葉にできない想いは本当にあるのか』

いしわたり淳治・著 筑摩書房・刊

耳にするが、それを言っている人は「口頭自分の感情をすべて言葉に出来ている」ということになる。「それって本当？」といしわたりはツッコミを入れる。

言葉は他人に感情を伝える道具なのだ、伝えられるのは「感情の近似値」に過ぎない。そのため「愛してる」という言葉によりリアリティを与えるために、「君の笑顔だけが僕の幸せ」などと具体的な事象に言い換えたりする。それでも自分の「想い」と言葉には隔たりがあるという。そんなことばかり考えているいしわたりは、誰かが言葉の新しい使い方をしていると嬉しくなると述べるのだった。

愛してるだとか悲しいとか言わず

に、想いを具体的なモノに託す方法は俳句にも通じている。俳句の場合は五七五の調べが感情を伝える手助けをし、歌の場合はメロディがその役割を担う。

「なきがらや秋風かよふ鼻の穴 蛇笏」

「鼻の穴」のリアリティには驚かされる。もはや生者としての反応を示さなくなった空洞に焦点を当てて、深い哀しみを表わしている。この句のあまりにも突き放した表現には賛否両論あ

『言葉にできない想いは本当にあるのか』は、若手作詞家の中でも理論派として知られるいしわたり淳治のコラム集だ。テレビ番組や広告、本、映画、もちろん音楽など、日常的に触れるメディアから発せられる「気になるフレーズ」を取り上げて独自の視点から解説してみせる。言葉の仕事をしている人ならではの敏感さと、ロジックの意外性で楽しめる一冊になっている。いしわたりは青森が生んだ超個性派ロックバンド「スーパーカー」のギタリストとしてデビューし、バンドの全曲の作詞を担当。バンド解散後、作詞家としてリトルグリーモンスターやスーパースターに歌詞を提供したり、プロデューサーとしてグリム・スパンキーなどの制作を手掛けている。最近ではテレビ番組「関ジャム完全燃SHOW」での歌詞の論理的な分析が人気を集めている。

この本におけるいしわたりの立ち位置は、前書きに顕れている。よく「言葉にできない想い」というフレーズを耳にするが、故人をモノとして突き放しているからこそ世の無常が伝わってくるのだと僕は思う。

松任谷由実の楽曲デジタル配信がスタートするときのCMのキャッチコピーは、「これからはじめてユーミンを聴ける幸せな人たちへ。」だった。このコピーに対していしわたりは「遠足は当日よりも前の日の方が楽しい」と共感する。

「文月や六日も常の夜には似ず 芭蕉」
七夕はその前日も何やら艶めいてい

るようだという、芭蕉の心情から生まれた句。いしわたりにすれば、これも七夕の優れたキャッチコピーだということになるのかもしれない。
「心が折れる」というフレーズを初めて聞いたとき、いしわたりは「えっ、心って棒状だったんだ？」と思ったと言う。一般的な「心」のイメージはハート型で、どちらかといえば平面だろうし、だから、「心が割れた」は理解できる。「心が晴れる」という言葉もあるから、基本的には透明な素材でできているのではないかと想像を広げる。

心が棒状だと知らなかったいしわたりは、そこを出発点にして論を展開。それが滅法面白く、この本の大きな魅力になっている。

「去年今年貫く棒の如きもの 虚子」
虚子が時間という抽象的なものを、見事に具象として捉えた有名な句だが、おそらく虚子は「時間が折れる」とは思っていなかったのではないかもしれない。いしわたりがこの句を読んだら、どんな解説をするのか想像すると楽しくなった。

テレビ番組『アメトーク！ 緊急!! 江頭2:50SP』での面白いやり取りを、いしわたりは取り上げる。芸人の、「江頭2:50」が「好きな食べ物は何？」と聞かれて、「ハマチの刺し身」と答えた。この答をいしわたりは、「なんてちょうどいい意外さだろう」と思ったという。確かにこのひと言は、自己紹介として秀逸だ。初対面の人から「初めまして、〇〇です。好きな食べ物は何ですかの刺し身です」といきなり言われたら、そのキャラクターが刷り込まれて絶対に忘れな

この「ちょうどいい意外さ」は、俳句でもかなり有効な名句の条件になる。

「泰山木白波のごと崩れ去りぬ

木下李太郎」

泰山木の真つ白な大輪が、崩れるように散っていく。その様を白波と言いつつ留めた。この比喩はちょうどいい意外さで、読む者に泰山木の花を印象付ける。狙い過ぎでもなく、付き過ぎでもない。それは日常の詩である俳句の真理であり、いしわたりの関わるポツプスやロックのコツでもある。そしてそこに、いしわたりの言葉を扱う人間としての覚悟と、表現者ならではの気付きを僕は感じる。本書は、普段見過ごされがちな言葉の裏側にあるものを、いしわたりが次々と発見して楽しませてくれる快著だ。

ちなみに吉田鴻司師にも、ちょうどいい意外性を持った自己紹介の句がある。もし鴻司師に「最近、ハマっているものは何ですか？」と聞いてみたらしよう。

「この頃や甘さが好きで走り諸 鴻司」



「金沢八景・ここはかつての景勝地」鈴木 崇

京浜急行・金沢八景駅のホームには古めかしい案内板が立っている。常日頃利用している駅で何度となく目にしてきたが、意識したのは句材を求めるようになってからのことだ。

今回はこの案内板にしたがって町歩きをしてみた。

海に向かって歩くと湾に面した瀬戸明神がある。この地は海上交通の難所であったため、5〜6世紀の頃から海神を祀っていたそうだ。

社殿背後は、山の斜面から垂直に切り立った崖となっており、そこに横穴を掘った失倉もあり、鎌倉文化の寺社に典型的な特徴が見られる。

湾に突き出た小島は、琵琶に似ている形から、「琵琶島」と名付けられ、島内の神社には弁財天が祀られている。

「史跡金沢八景」は、歌川広重の浮世絵「武州金沢八景」に描かれ、景勝地として江戸の庶民に親しまれた。

「瀬戸の秋月」はこのあたりの一景。平潟湾に沿って歩くと釣船店が並んでいる。周辺は「洲崎の晴嵐」「平潟の落雁」に描かれている。持従川流域は「内川の暮雪」に描かれた場所だ。

傘沢は野菊の中よ鯊をつる

佐藤惣之助

川崎生まれの大衆詩人の句。平潟湾は神奈川県屈指のハゼ釣りポイントであるという。

「野島の落雁」の野島は明治時代、東京近郊の別荘地として注目された。現在、野島公園内に旧伊藤博文金沢別邸が復元されて残っている。庭園の松の木越しに眺める海は美しい。

この辺りは海浜に関連する地名が多い。瀬戸、平潟、乙舩、洲崎……「乙舩の帰船」の「おつとも」は恥ずかしながら読めなかった。

住宅街を進むと称名寺の赤門が見えてくる。参道の突き当りには仁王門。通用門か

ら回って入ると、まるで絵のような風景が広がっている。「絵のような」というのは大げさではない。中之島・反橋・平橋を配した「浄土庭園」、その向こうに金沢三山(金沢山・稲荷山・日向山)を背にした金堂・釈迦堂・鐘楼(「称名寺の晩鐘」はこの鐘)。ほとんど絵葉書のような完璧な構図で目の前に広がっているのだ。

金沢三山は市民の森として整備されハイキングコースとなっている。山中には北条実時の墓、八角堂などがあり、コソパクトだが歩き甲斐がある。

境内脇からトンネルを抜けると金沢交庫。もとは実時の私設文庫から発展したもので、現在は「県立金沢交庫」として調査・研究の成果を展示や講座を通じて公開している。

境内と金沢文庫を結ぶ「中世の隧道」が今でも残されている。通行することはできないが、中世にうがたれた道からこの地の歴史がナマで感じられる。



金沢八景駅・ホームの案内板

集音羽

選 栗人成増



会津 中川幸恵

松戸 吉清和代

船橋 藤原明美

土浦 小林和子

俳誌のサロン

氏神のご奉仕始めお元日
柏手を大きく打ちて初詣
子の受けし破魔矢の鈴のよく鳴りぬ
御節料理いもごんぼも薄味に
お飾に折鶴を添へ子の来る日

大阪 遠藤 泉

教会のステンドグラス冬が来る
軒下の猫の寄り添ふ雪催
数へ日や録画予約がいつばいに
前髪の気になる少女冬帽子
繕ひの幾つも婆のちゃんちゃんこ
人は人と人に言はるる寒さかな
たそがれて途方に暮るる屋根の雪
虎落笛傷つけ合うて人は生き
日向ぼこ日陰恋しくなりにけり
倒るるまで独楽は必死に回りけり
元旦の富士に一朵の雲もなし
産土のふくら雀に日のあたる
石畳踏む臘梅の香に惹かれ
小豆粥ふつつ恙なき暮らし
みどりごの手に握らせるお年玉
空真青娘がインバネス買うてくる
山腹の四戸に冬の日が溜る
暮れ残る山あり枯れを尽くしけり
一と月だけ開くスケート場に雪
松過ぎてひとり居にまた戻りけり



俳句における
写生って
どう考え
たらいい
のでしょうか

まず写生を
心掛ければ
目ずと
春夏秋冬を
ダイレクトに
体感する
ことになる

人は思わぬ
ところに
季節の
うつろいを
見つけて感動し
そこに詩を
覚える

写生とは
その詩心を
俳句という
かたちにか
かえる
一手段だが

俳句の
短さ
にも
適った
もつとも
効率的な方法
だろうか

思わぬ
ところに
詩か
ナルホド！
!?

詩ヲ
感じ
タン
デス!!

毎年季節のうつろいを
これで感じるのよね

スママセン
主人が今年も...

<http://www.haisi.com/koh/index.htm>